

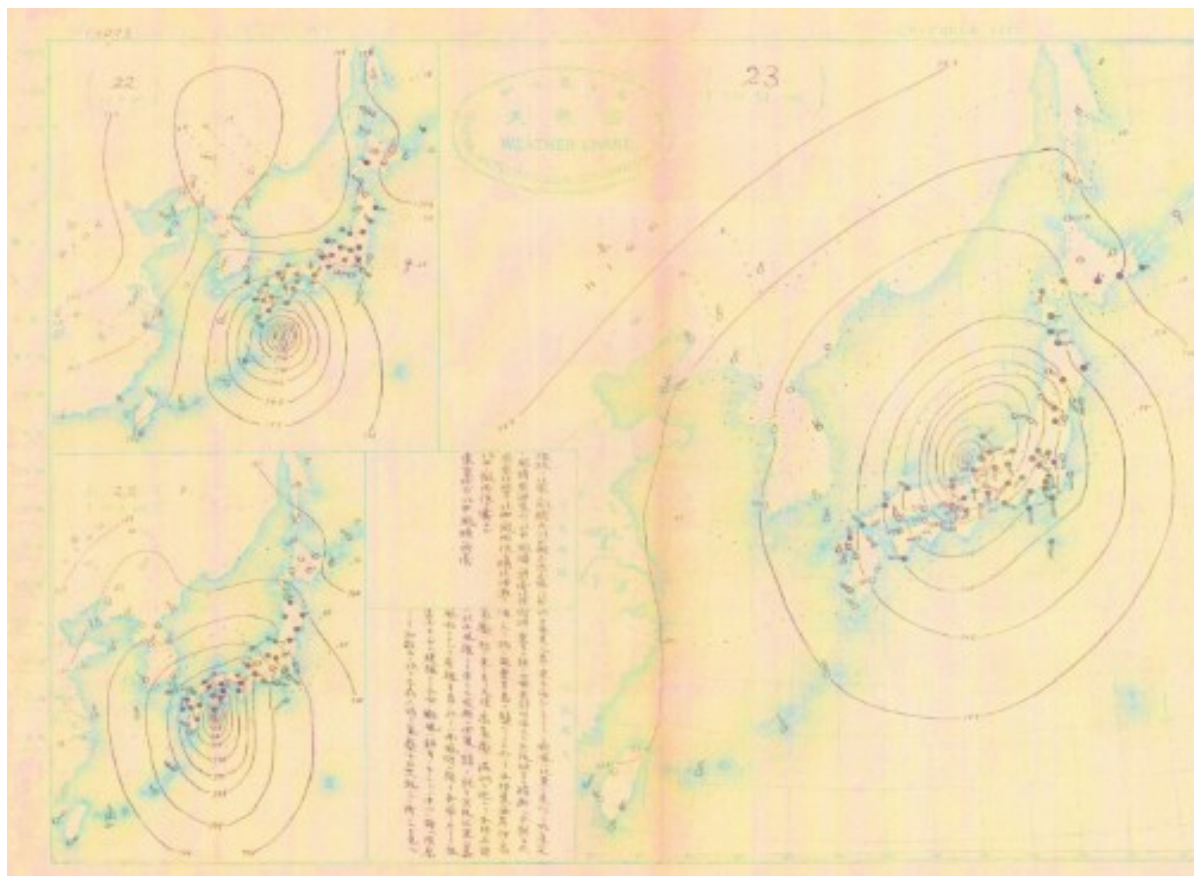
大正元年 9 月洪水

大正元(1912)年9月21～23日

■気象の概況

徳島県と和歌山県の概況によると、9月22日夜半、台風が徳島県の東部海岸をかすめて北上、21日から22日にかけての雨量は5005ミリ内外で風水害が大きく、経路が室戸台風（1934年＝昭和9年）と似ていて高潮害も大きかった。和歌山県では9月21日から22日にかけて未曾有の暴風雨が襲来し、台風が946ミリバールの気圧を伴って県内を通過した。

参考文献・四国災害アーカイブス／国土交通省和歌山河川国道事務所ホームページ



「天気図」大正元年9月23日付 中央気象台 1912-09.

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12896664> （参照 2025-03-03）

また、当時の天気図（9月22日付）は概況を以下のように伝えている。

「台風は奄美大島の東方海上にあって北北東に徐行している。高気圧は中国北部とモンゴル方面にそれぞれ広がり、その一端は朝鮮と西フィリピン海岸に迫ろうとしている。全ての国で雨であり、琉球北部には多大な降雨がある。（奄美大島の）名瀬では八時間の総雨量が105ミリバールに及び、朝鮮は曇りだが、満州では天気晴朗である」（現代文に意識）

■被害の状況

中国地方では鳥取県の被害が大きかった。三大河川の一つで、流域が鳥取市と八頭郡の1市3町にまたがる千代川が氾濫。この洪水の浸水家屋は9876戸、完遂面積は8693ヘクタールに及んだ。死者は92人、負傷者8人、行方不明者3人、建物流出1779戸、田畑の流出2844町に上る。伊藤康「千代川水系の水害と改修事業―鳥取県の水災史・その二」（鳥取県立公文書館研究紀要10号、研究ノート）に基づいて被害の状況を要約すると、この夏はもともと渇水に見舞われ、上水道の配水時間を制限するほどだったが、一転して明治26年水害以来という大水害が発生した。これは9月22日夕刻から四国東端や大阪湾を経て能登半島に抜けたら台風によるもので、21日から23日までの降雨量は鹿野で291ミリ、賀露で176ミリに達した。被害は気高郡と八頭郡に集中し、千代川の支流の氾濫による。鳥取市内について当時の因伯時報は「愛宕山より見たる大洪水の光景」と題し「市街を泛（うか）べたる水面は静かにして淵の如く水湛々として動かず」と表現した。また、鳥取新報は「床下に浸水せざるものは全市七千近くの内に四五百戸あるのみ」と報じている。鳥取市当局は9月29日に市会を開催し、伝染病予防のための石灰の費用、今でいう災害ごみの処理費用を追加予算として計上した。市街に堆積した汚泥などの処理には県庁や警察との申し合わせにより隣村・宇倍野村の消防隊から人手を出した。



写真は「鳥取市未曾有の大洪水の惨状（大工町筋の光景）」（鳥取県立博物館蔵）